

広島市における感染症発生動向調査結果について (2001 年)

上野 博昭 宮本 伸一 長谷川 宏行

はじめに

平成 11 年 4 月、「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律」が施行され、感染症発生動向調査事業¹⁾が全国的規模で実施されている。広島市では、結核・感染症発生動向調査事業の充実と感染症対策の一層の強化を図るため、実施要綱が改正され、13 年 4 月からは衛生研究所に感染症情報センターを置き、衛生研究所で感染症情報の収集、解析、提供・公開を行うこととなった。今回、2001 年の広島市における感染症患者発生状況をまとめたので報告する。

方 法

1 対象疾患

対象疾患は、国の実施要綱に示される一類感染症 (エボラ出血熱等 5 疾病)、二類感染症 (急性灰白髄炎等 6 疾病)、三類感染症 (腸管出血性大腸菌感染症 1 疾病)、全数把握対象の四類感染症 (アメーバ赤痢等 33 疾病) 及び定点把握対象の四類感染症 (インフルエンザ等 28 疾病)、合わせて 73 疾病とした。

2 患者情報の収集

全数把握対象の感染症については市内医療機関から、定点把握対象の四類感染症については定点医療機関から週単位又は月単位で、各行政区に置かれている保健センターに届出又は報告される。各保健センターでは、感染症発生動向調査システムにより患者情報の入力処理と感染症情報センターへの報告処理が行われ、感染症情報センターではこれら報告内容の確認と全市分の集計処理を行った。

全国情報は、中央感染症情報センター(国立感染症研究所)から還元されるデータを用いた。

3 定点医療機関

定点把握対象の四類感染症については、定点医療機関 (患者定点) から疾病区分により週単位又は月単位で報告される患者発生情報を収集した。市内に置かれた患者定点の内訳は、インフルエンザ定点 (小児科定点を含む) 37、小児科定点 24、

眼科定点 8、性感染症定点 9、基幹定点 7 である。

4 調査期間

平成 13 年 1 月 1 日 (2001 年第 1 週)～平成 13 年 12 月 30 日 (2001 年第 52 週)。

結 果 と 考 察

1 全数把握対象疾病

医療機関から届出のあった疾病は、二類感染症は細菌性赤痢、三類感染症は腸管出血性大腸菌感染症、四類感染症はアメーバ赤痢、急性ウイルス性肝炎、クロイツフェルト・ヤコブ病、劇症型溶血性レンサ球菌感染症、後天性免疫不全症候群、ツツガムシ病、梅毒、破傷風、バンコマイシン耐性腸球菌感染症、マラリア及びライム病の 11 疾病で、合わせて 13 疾病であった。一類感染症については届出がなかった。2001 年における各疾病の届出数を表 1 に示す。

届出数の比較的多かった疾病としては、腸管出血性大腸菌感染症の 39 人が最も多く、続いてツツガムシ病 23 人、急性ウイルス性肝炎 13 人、細菌性赤痢 11 人などとなっている。腸管出血性大腸菌感染症は 8 月に 15 人と届出が多かったが、年間で

表1 全数把握対象疾病の届出数 (2001年)

類型	疾 病 名	届出数
二類	細菌性赤痢	11
三類	腸管出血性大腸菌感染症	39
四類	アメーバ赤痢	4
	急性ウイルス性肝炎	13
	クロイツフェルト・ヤコブ病	1
	劇症型溶血性レンサ球菌感染症	1
	後天性免疫不全症候群	3
	ツツガムシ病	23
	梅毒	3
	破傷風	1
	バンコマイシン耐性腸球菌感染症	1
	マラリア	1
	ライム病	1

は前年の40人とほぼ同数であった。届出数39人中26人(66.7%)は散発事例であった。性別では男性17人、女性22人で、血清型別は0157が28人(71.8%)、026が11人(28.2%)であった。本市のツツガムシ病は、患者数が全国でも比較的多く、過去3年間をみても1999年12人、2000年19人で増加傾向が認められる。患者発生時期は4月～5月が2人、10月下旬～12月が21人となっており、なかでも11月は16人と最も多かった。また市内北部地域に位置する医療機関からの届出が多くみられ、患者の年齢分布は50歳以上が18人(78.2%)であった。推定される主な感染源・感染経路としては、農作業、山菜採取、草刈り、レジャーなどとなっている。急性ウイルス性肝炎13人の内訳は、性別では男性10人、女性3人で、病原体別ではA型8人、B型4人、C型1人であった。細菌性赤痢11人の菌型別内訳は、ソネネI相7人、フレキシネル2a 2人、フレキシネル2b 2人で、4人が海外旅行での感染例であった。

2 定点把握対象四類感染症

(1) 週単位報告疾病

インフルエンザ定点、小児科定点、眼科定点及び基幹定点から毎週報告される21疾病の報告数を表2に示した。年間の定点あたり累積報告数をみると、感染性胃腸炎の299.0人が最も多く、続いて水痘83.0人、流行性角結膜炎73.3人、ヘルパンギーナ71.8人、A群溶血性レンサ球菌咽頭炎52.1人、流行性耳下腺炎47.9人、突発性発疹46.1人などとなっている。

過去3年間の広島市における患者報告数の推移、又は2001年の全国との比較においてその発生規模等に特長が認められた疾病として、インフルエンザ、伝染性紅斑、ヘルパンギーナ、麻疹及び流行性耳下腺炎について検討を行った。これら5疾病について、広島市と全国における週別の定点あたり報告数の推移を図1に示す。

a インフルエンザ

年間の定点あたり累積報告数は21.7人で、前年の193人と比べ前年比0.11と大きく減少した。2月に入ってから第7週に定点あたりの報告数が1.46人と、流行開始の目安となる定点あたり1.0人を超えたものの、第11週の2.84人がピークで、以降消退した。

b 伝染性紅斑

年間の定点あたり累積報告数は29.4人で、前年の10.1人に比べ前年比2.91と大きく増加した。定点あたりの報告数の推移をみると、1月中旬以降は前年の同時期を上回って緩やかな増加傾向がみられた。第26週の定点あたり報告数2.0人がピークで、以降

表2 定点把握対象四類感染症患者報告数
(週単位報告分) (2001年)

疾 病 名	報 告 数	
	() 内は定点あたり 累積報告数	
インフルエンザ	802	(21.7)
咽頭結膜熱	113	(4.71)
A群溶血性レンサ球菌咽頭炎	1,251	(52.1)
感染性胃腸炎	7,171	(299.0)
水痘	1,991	(83.0)
手足口病	871	(36.3)
伝染性紅斑	705	(29.4)
突発性発疹	1,106	(46.1)
百日咳	33	(1.38)
風疹	34	(1.42)
ヘルパンギーナ	1,724	(71.8)
麻疹	212	(8.83)
流行性耳下腺炎	1,149	(47.9)
急性出血性結膜炎	25	(3.13)
流行性角結膜炎	586	(73.3)
急性脳炎	13	(1.86)
細菌性髄膜炎	7	(1.00)
無菌性髄膜炎	86	(12.3)
マイコプラズマ肺炎	136	(19.4)
クラミジア肺炎	5	(0.71)
成人麻疹	8	(1.14)

減少に転じた。

c ヘルパンギーナ

年間の定点あたり累積報告数は71.8人で、前年の44.9人と比べ前年比1.60と増加した。5月下旬の第22週ごろから急増し、定点あたりの報告数は第27週の13.9人がピークで以降減少に転じた。

d 麻疹

年間の定点あたり累積報告数は8.83人で、前年の1.71人と比べ前年比5.16と大きく増加した。1月中旬から定点あたりの報告数が0.1人～0.2人程度で推移していたが、4月に入ってから第15週ごろから急増し、その後は増減を繰り返しながら7月中旬まで全国とほぼ同様の流行がみられた。定点あたり報告数の最大値は第19週の0.79人であった。

e 流行性耳下腺炎

年間の定点あたり累積報告数は47.9人で、前年の27.5人と比べ前年比1.74と増加した。全国では第19週以降定点あたりの報告数が過去10年の同時期と比較して最大のレベルで推移したが、広島市では

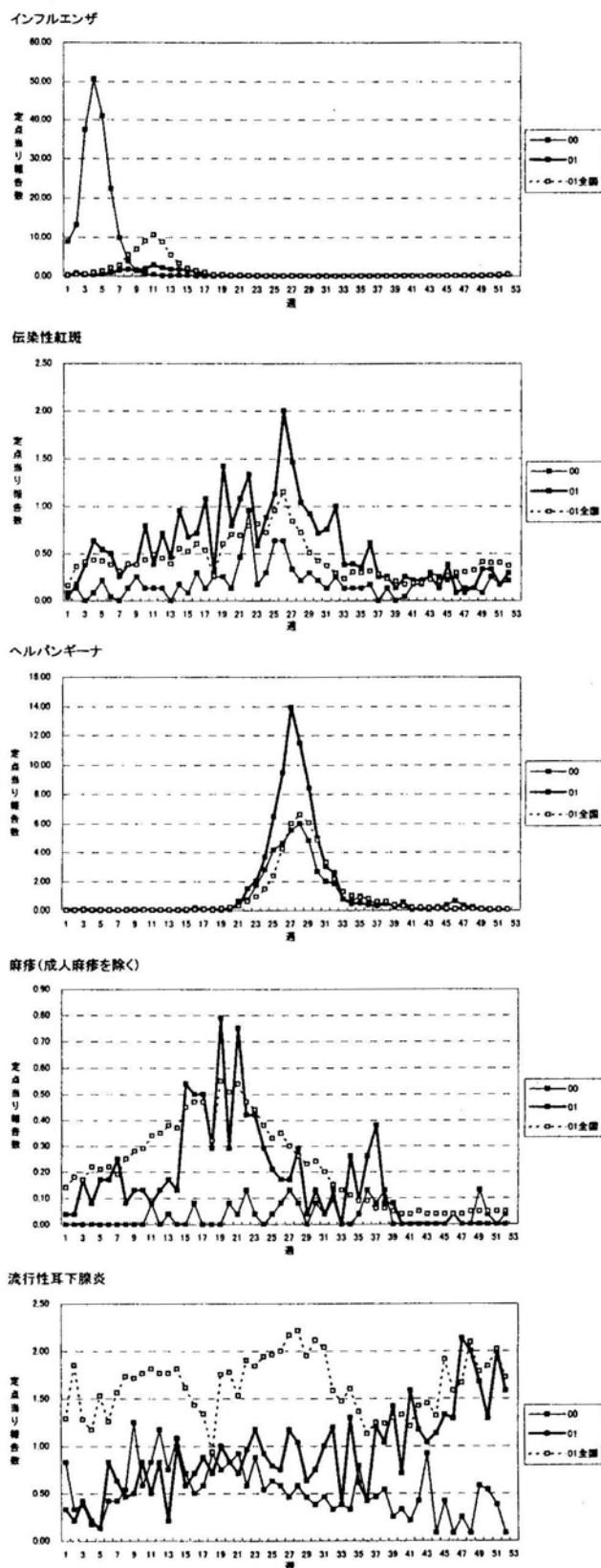


図1 定点あたり報告数の週別推移

表3 定点把握対象四類感染症患者報告数

(月単位報告分)

(2001年)

疾 病 名	報 告 数	
	()内は定点あたり累積報告数	
性器クラミジア感染症	240	(26.7)
性器ヘルペスウイルス感染症	88	(9.78)
尖形コンジローム	58	(6.44)
淋菌感染症	236	(26.2)
メチシリン耐性黄色ブドウ球菌 感染症	724	(103)
ペニシリン耐性肺炎球菌感染症	346	(49.4)
薬剤耐性緑膿菌感染症	25	(3.57)

全国に比べ低い水準であったものの、年間を通じて緩やかな増加傾向がみられ、9月に入って第37週ごろには全国とほぼ同じ水準となった。

(2) 月単位報告疾病

定点把握四類感染症で性感染症定点及び基幹定点から月単位で報告される性感染症4疾病及び薬剤耐性菌感染症3疾病の報告数を表3に示す。

a 性感染症

性感染症4疾病のうち、年間の定点あたり累積報告数が最も多かったものは、性器クラミジア感染症の26.7人で前年比1.00、続いて淋菌感染症の26.2人で前年比1.16であった。性器ヘルペスウイルス感染症と尖形コンジロームを加えた性感染症総数は、前年比1.09とほぼ横ばいであった。

b 薬剤耐性菌感染症

年間の定点あたり累積報告数は、メチシリン耐性黄色ブドウ球菌感染症が103人と最も多く、続いてペニシリン耐性肺炎球菌感染症49.4人、薬剤耐性緑膿菌感染症3.57人であった。いずれの疾病も前年より報告数が大きく増加し、また全国との比較においても多い傾向がみられた。

文 献

- 1) 厚生省保健医療局長通知 (平成11年3月)
「感染症の予防及び感染症の患者に対する医療に関する法律の施行に伴う感染症発生動向調査事業の実施について」